

# 九州における細石器文化

——細石核の分類と編年試論——

橘 昌 信

## 1

先土器時代の終末に位置づけられ、土器の出現と深い関連をもつと考えられる九州の細石器文化は細石核・細石刃によって特徴づけられている。細石核出土の遺跡数も40個所をうまわり、西北九州を中心に宮崎・鹿児島まで知られ細石器文化が九州全域に認められるのである。

九州において細石核・細石刃を出土する遺跡は極めて複雑な様相を示めしているように思える。昭和35年、福井洞穴の調査で第Ⅱ・Ⅲ層において爪形文土器や隆起線文土器が細石核・細石刃に伴うことが明らかになり、先土器文化と縄文文化の関連が新たな角度から問われたのであった。その後、鹿児島県の上場遺跡Ⅱ層においても爪形文土器が共伴する事実が確かめられ細石器文化の一部に土器の伴うことが単に西北九州における特殊な様相でなく、南九州までその空間的な広がりをみせたのである。さらに最近の調査で佐世保市泉福寺洞穴ではこれまでに知られていた爪形文・隆起線文土器とは別の無文土器が登場しているのである。また福岡県春日市の門田遺跡でも爪形文土器が伴うようであり、北九州地域の細石核・細石刃のあり方にも新たな局面が展開されつつある。このように細石核・細石刃に伴う土器にしても概に三つの違ったタイプが認められ、その拡がりも西北九州から北九州さらに南九州へと拡大されているのである。

細石核・細石刃の共伴遺物については土器以外でも、九州においては細石核・細石刃を出土する多くの遺跡で土器を伴わず、小形のナイフ形石器や台形石器を共伴しているのである。正式に調査されたそれらの代表的な遺跡として、佐賀県原遺跡、福岡県野黒坂遺跡・峠山遺跡、長崎県百花台遺跡、宮崎県船野遺跡などを挙げることができる。これらの遺跡における様相は細石器文化の一部にナイフ形石器や台形石器が共伴する可能性を示めしていると同時に、細石器文化よりも古い時期に編年されている刃器文化のナイフ形石器、台形石器などの一部が新しい時期まで存続することを示唆するものと考えられる。その一方、福井洞穴のⅣ層ではナイフ形石器や台形石器を全く伴わず、多量の細石核・細石刃が主体を占めるという状況である。また百花台遺跡では台形石器を出土する層より上位に細石核・細石刃がナイフ形石器と共に出土するという調査結果が層位的に得られているのである。

細石核の形態についても野岳遺跡で代表される円錐形・半円形錐をしたもの、唐津周辺に多く認められる半舟底状のもの、さらに福井洞穴Ⅱ・Ⅲ層において顕著な舟底状のものなどバラエティに富んでいるようである。

以上、二三簡単に触れただけでも複雑な様相を示めることが充分窺いがえるのである。

このような九州の細石器文化について、これまで先学の層位的な発掘調査や技術的・形態的研究によって細石核の変遷が示めされ細石器文化の系統についての仮説が導き出されており、特に最近では細石核の技術的な分析や広い視野に立っての九州の細石器文化の位置づけなどの<sup>⑦</sup>労作がみられるのである。先学の成果を踏まえながら九州の細石器文化を細石核の製作手法（製作過程）から考察を行ない細石器文化の理解に少しでも役に立てばと考える。

## 2

まず九州においてこれまでに知られている細石核をその製作手法からいくつかのパターンに分類することから始めたい。

細石核の母型を得るため素材の円礫・角礫に加えられた打撃による剝離面が細石核の側面形成の一部をなすのもを<sup>(註4)</sup>Aグループとする。同じく母型を得るため素材に加えられた剝離面が細石核の打面として利用されるものをBグループとしてまず二大別を行ない細石核分類の基礎とする。次にA・Bグループをそれぞれ、剝片を母型に選択したものと礫ないし礫の一端あるいは両端を剝離した残りの謂ゆる核を細石核の母型としたものとの細分を行う。これまでも細石核の分類を行う際「剝片を素材にするもの、荒割り礫を素材とするもの」や「両面加工品、小形の円礫・角礫」という<sup>⑩</sup>素材の違いを基礎<sup>⑪</sup>においているようである。しかし筆者は細石核の母型を得るために加えられた打撃が細石核の側面を形成するかあるいは打面形成をなすかを重視するものである。つまり細石核における打面形成と側面形成の先後関係を問題にするわけである。

## A—I型細石核（第1図）

① 円礫を縦割りにして比較的厚味のある剝片をとり細石核の母型とする。母型として選択した剝片の片面にみられる主要剝離面は細石核の側面としてほとんど加工を加えずに利用される。逆の自然面のある面は下端あるいは横方向からの打撃によって剝離が施こされ、一方の側面を形成する。

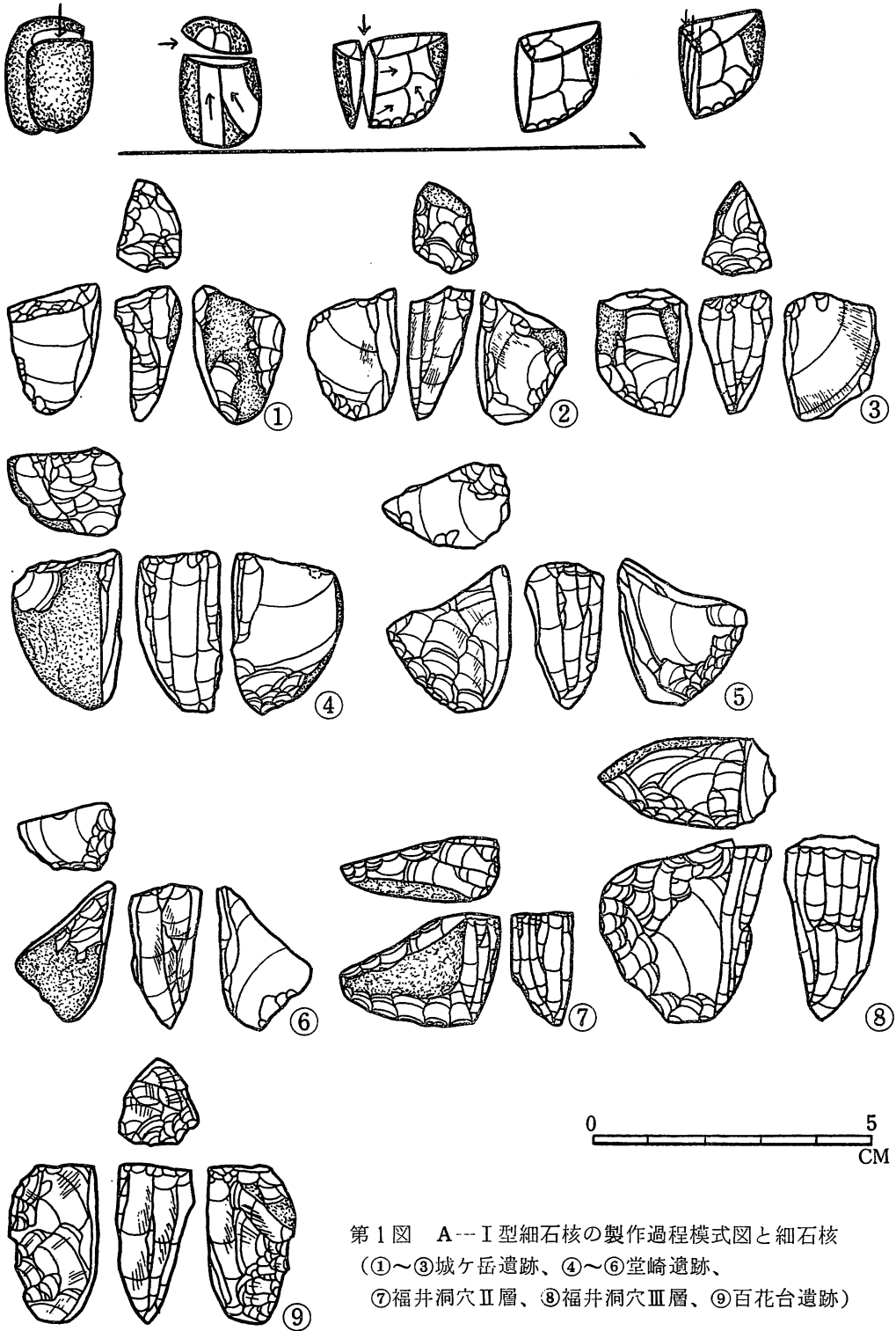
② 母型の剝片に長軸の一端あるいは一方の側面より斜め方向に打撃を加え細石核の打面作出を行う。打面の形成によって剝片の主要剝離面に残されていたであろう打撃面ならびにポジティブバルブはカットされ同時に自然面に施こされた側面調整の剝離面の一部もカットされることになる。

③ 細石核の長軸の一端に細石刃剝離面を打撃によって形成すると共に、周辺よりのこまかな剝離によって側面調整を行う。円礫を縦割りにした剝片を母型に選択しているので概に大まかな舟底状を呈しており、側面調整は主要剝離面の逆の面に多く施こされ、主要剝離面側は周辺部にのみ集中する傾向がみられる。

④ 細石核打面の長軸に平行ないし直行する方向からの打面調整を施こす。

⑤ 長軸の一端から細石刃剝離を行う。

A—I型は謂ゆる舟底形細石核と呼称されているものである。側面は周辺よりの剝離によってこまかく調整されるが、側面の一部には剝片の主要剝離面や自然面が残されたままの状態のものが大半を占めるようである。打面の上面観は長二等辺三角形を呈し、A—II型の礫の一端を剝離したあるいは両端に打撃を施した楔形の核を母型としたものとの違いが指摘できる。



第1図 A--I型細石核の製作過程模式図と細石核  
 (①~③城ヶ岳遺跡、④~⑥堂崎遺跡、  
 ⑦福井洞穴Ⅱ層、⑧福井洞穴Ⅲ層、⑨百花台遺跡)

A-I型は福井Ⅱ・Ⅲ層，原B地点，上場Ⅱ層，宇久城ヶ岳，唐津周辺，佐世保周辺等の各遺跡出土の細石核の中に認められる。  
(註5)

#### A-II型細石核 (第2図)

① 円礫の一端ないし両端に打撃を施し，縦長の自然面をもつ剥片を除去した核を細石核の母型として用いる。円礫の一端のみ剥離を加えたままで母型として用いる場合と，さらにもう一方の端にも上方あるいは下方から打撃を施した楔形の核を母型とする場合とが存在する。いずれにしても礫に加えられた打撃による剥離面が細石核の一方ないしは両方の側面としてすでに用意されているのである。

② 母型とした核側面の剥離面を打面として横方向から斜めの剥離によって細石核の打面形成をおこなう。

③ 打面の長軸の一端に打撃を加え細石又剥離面を作出すると同時に両側面を周辺からの剥離によって舟底状に調整を行う。この側面調整は礫の段階で打撃を施こされた剥離面全体におよぶ場合と周辺にのみ集中する場合とがある。

④ 細石核の打面調整のための剥離が施こされる。

⑤ 舟底状をした細石核の長軸の一端に細石又剥離が行なわれる。

A-II型は母型に礫ないし楔形をした核を使用しているため，細石又剥離面の正面はA-I型に比較して厚みがあり，逆の背面は円礫の自然面が最後まで残されることが多く，一般に円形に近い形を呈する。このため打面の上面観はカマボコ状をなしている。A-I型と同様，打面の作出以前に側面調整の一部が概に用意されているのである。

A-II型の細石核を出土している遺跡はA-I型とほぼ共通している。

#### B-I型 (第3図)

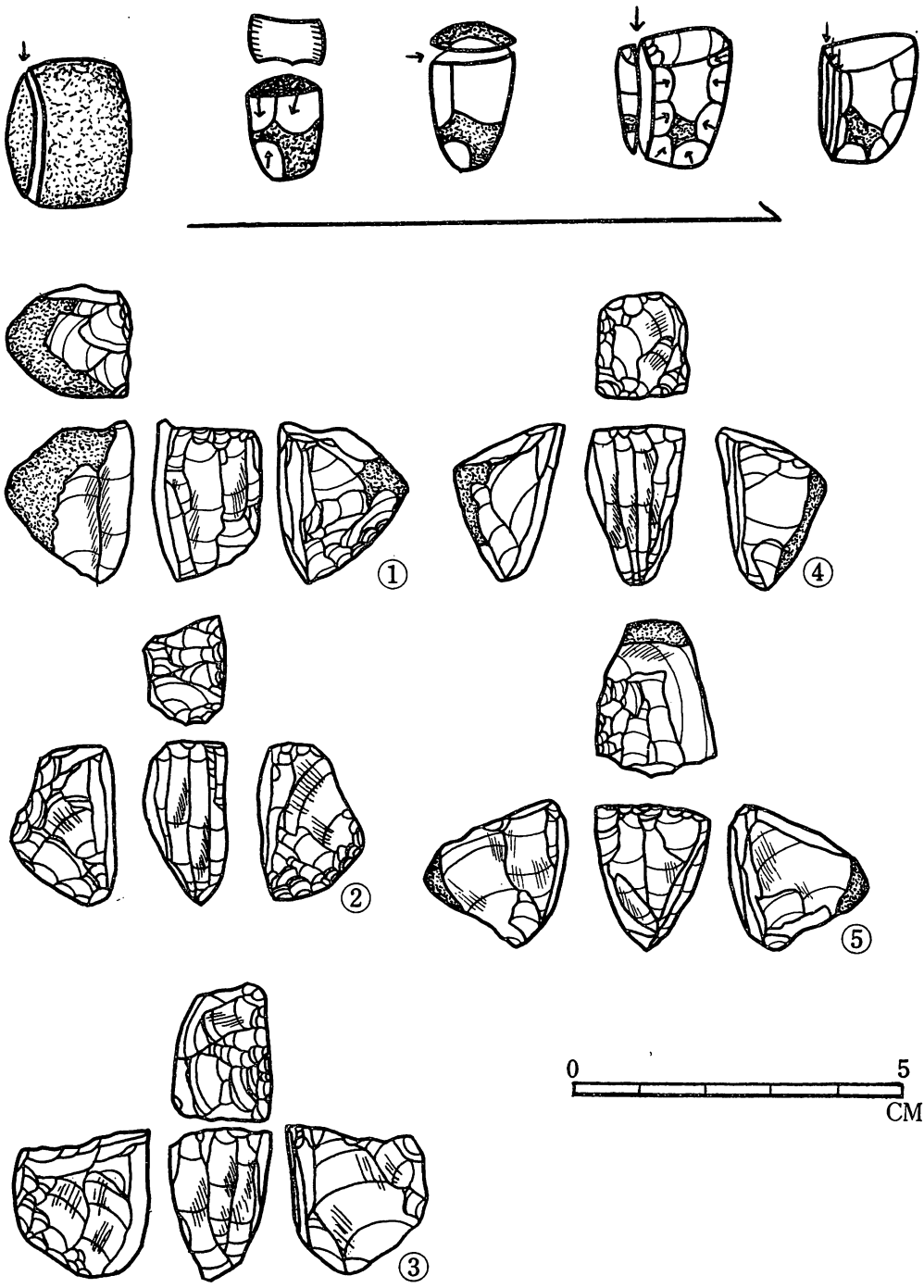
① 礫の一端に打撃を施して打面を作る。

② 打面を利用して横方向からの加撃によって細石核の母型となる厚みのある剥片をとる。この母型となる剥片は縦長の剥片と横に長い剥片とが素材に選ばれているが，両者とも母型を得るために打撃が加えられた剥片の主要剥離面が細石核の打面としてそのまま利用される。

③ 剥片の主要剥離面を打面として周辺に打撃を施こして側面調整を行う。この側面調整の剥離は主として打面より行なわれるが，下端からの打撃が施こされているものも認められる。なをこの側面の剥離は母型が縦長剥片では両側面に，横長剥片の母型では打面側とその逆の先端にあたる部位に施こされることになる。

④ 打面調整は全くおこなわれず，縦長剥片の母型では打面とは逆の一端から，横長剥片では長軸の両端からそれぞれ細石又剥離を行う。

B-I型は分割した礫の剥片の方を素材に選び，しかもその剥片の主要剥離面が細石核の打面としてそのまま使用され，側面の調整に先だてて作出する点に大きな特色が認められる。分割した礫の剥片の方を母型として用いるのは礫の大きさと得たいと意図する細石又の大きさ（特に長さ）に強く関連しているものと推察される。細石又剥離面の正面観は逆カマボコ状をなし，打面及び側面



第2図 A-II型細石核の製作過程模式図と細石核 (①⑤堂崎遺跡②~④城ヶ岳遺跡)

は長方形ないし方形を呈する。

B-I型を出土する遺跡については現在までのところ極めて例が少ないが宮崎県船野遺跡上層出土の細石核を典型的なものとする。九州地方では船野遺跡の他、福井洞穴VII層に比較的類似したものがみられる程度であるが、瀬戸内の櫃石島遺跡出土の細石核の中に極似したものが数点認められ興味深い。<sup>12</sup>

#### B-II型細石核（第4図）

① 小礫の一端に横方向からの打撃を加えて母型の打面形成をまず行なう。  
② 打面からの打撃によって周辺の自然面の除去を行ない母型を整形する。母型の側面調整の剝離は打面から下方に向かって施こされるが、側辺、下端から行なわれているものも見られる。いずれの場合も一面は表皮が残されたままで放置されこの面が細石核の背面を形成する。

③ 打面の調整を行なう。

④ 細石双剝離は細石核の一面に行なわれるが、両側面の一部にまでおよんでいるものや、ほぼ全周に渡って細石双剝離が行なわれているものも類例は少ないが存在する。

B-II型は講ゆる円錐形ないし半円錐形と呼称されている一群である。礫を素材にして礫に加えらるる最初の打撃が細石核の打面を形成し、その後側面の調整を施すのである。打面の上面観は円形ないし方形に近い形を呈し、正面及び側面は円錐形ないし角錐形に近い形をなしている。

B-II型を出土する遺跡の代表的なものとしては、円錐形・半円錐形細石核として先学によって何回となく示めされている野岳遺跡<sup>13</sup>を挙げることができる。この他長崎県堂崎遺跡<sup>14</sup>、原遺跡<sup>15</sup>、上場遺跡III層などの一部に認められる。

#### B-III型細石核（第5図）

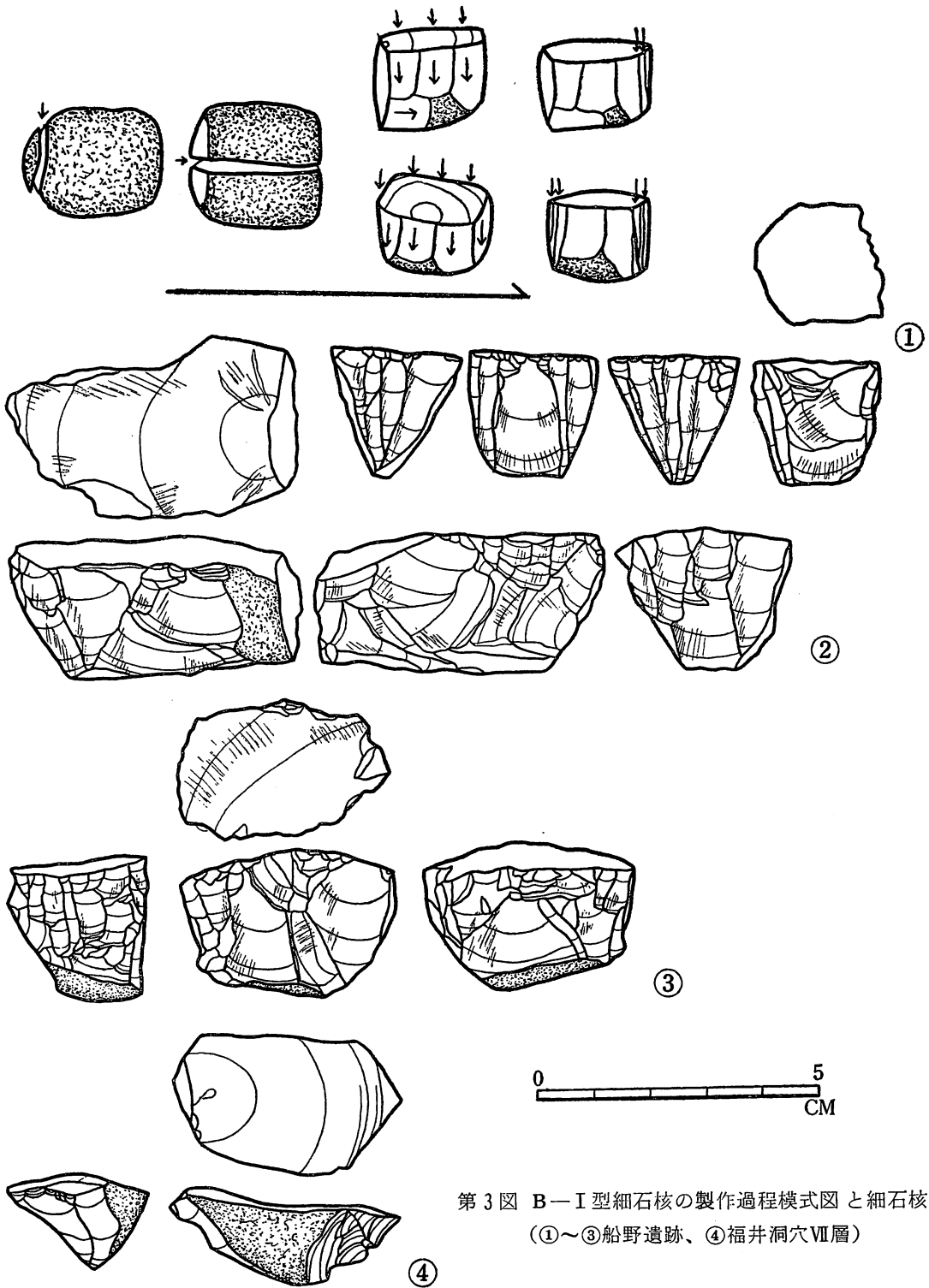
① 円礫の一端に横方向からの打撃を加え次の母型とすべき剝片を得るための打面を作出する。この礫に作出された剝離面は細石核の母型となるべき剝片をとるための打面として使用すると同時に細石核の打面としても利用されるのである。

② 礫の剝離面に打撃を加えて得た剝片を細石核の母型として使用する。剝片の打面がそのまま細石核の打面となる一方、剝片の主要剝離面が細石核の側面を形成する。この段階で概に舟底状に近い形の細石核の母型が得られることになる。

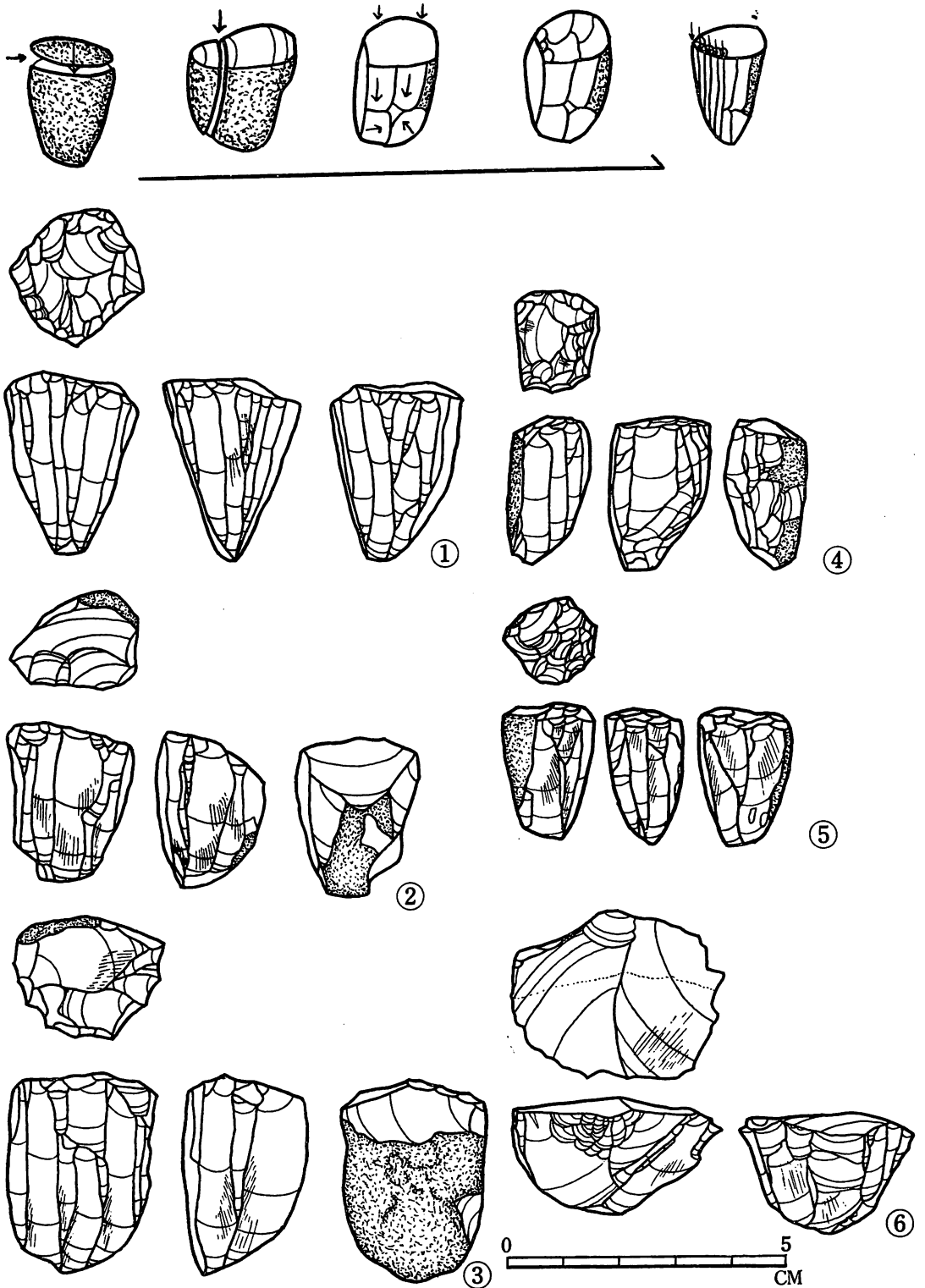
③ 母型の打面の長軸の一端に打撃を加え将来細石双剝離面となる面を作出する。このままの状態では細石双剝離作業に入るか、あるいは打面からの剝離によって側面の一部に調整を行った後次の段階に進む。

④ 細石核の長軸の一端から細石双剝離を行なう。

B-III型の素材の礫に加えられた最初の打撃が細石核の打面を形成する点はB-II型と共通するが、母型に剝片を利用する点で異なる。一方B-I型とでは母型が剝片ということで同じだが、その剝片の主要剝離面の利用で全く対照的である。すなわちB-I型では打面として、B-III型では側面としてそれぞれ使用されるのである。剝片を母型に選びしかもその剝片の主要剝離面が細石核の側面を形成する点A-I型と軌を一にするものであり、さらに舟底状に近い形を呈し長軸の一端

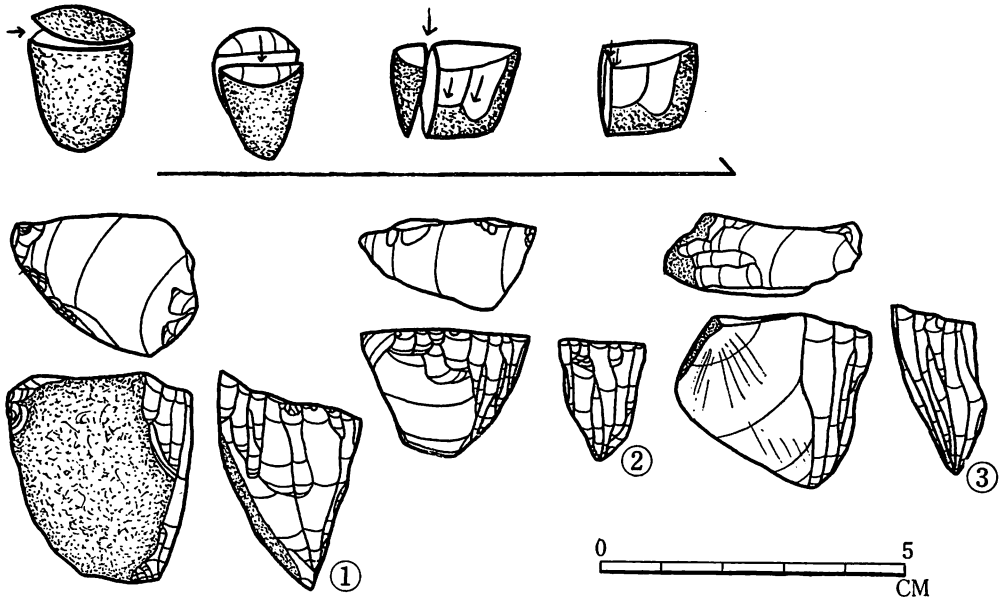


第3図 B-I型細石核の製作過程模式図と細石核  
 (①~③船野遺跡、④福井洞穴VII層)



第4図 B-II型細石核の製作過程模式図と細石核 (①~③野岳遺跡、④⑤堂崎遺跡、⑥福井洞穴IV層)





第5図 B-Ⅲ型細石核の製作過程模式図と細石核(①~③福井洞穴Ⅳ層)

に細石双剝離を施すなどはA-I・II型と符合し、技術的にも系統的にも近い関係が予想されるのである。その一方礫に加えられた最初の打撃が細石核の打面を形成することや打面調整がほとんど行なわれないこと、さらに側面の調整加工が顕著でないことなどを相違点として抽出することができる。このようにB-Ⅲ型はA-I・II型、B-I・II型のそれぞれに共通点と相違点を指摘することができるのである。それでB-Ⅲ型として呼称するよりも別の分類を用いる方があるいは適当かも知れないが、打面作出を側面調整に先だつて行なうことを基礎にしてB型のカテゴリーに入れる。素材の点では剝片を使用するのでB-I型とすべきであるが、剝片の主要剝離面を細石核の側面として利用することや全体の形状がA型に近いことなどを重視してB-I型とは分離しB-Ⅲ型とした。B-Ⅲ型の細石核は福井洞穴のⅣ層、上場遺跡のⅢ層出土の資料中や佐世保牟田池遺跡・郷美谷遺跡<sup>16</sup>に認められる。このB-Ⅲ型のみを多量に出土する遺跡は今のところ知られてなく、A-I・II型やB-II型の細石核と共に出土しているようである。

### 3

九州の細石核についての分類は麻生優<sup>17</sup>、芹沢長介・鎌木義昌<sup>18</sup>、林謙作<sup>19</sup>、小林達夫<sup>20</sup>の各氏らによって論じられている。また戸沢充則・鈴木忠司氏<sup>21</sup>なども原遺跡<sup>22</sup>や野岳遺跡<sup>23</sup>の資料を通じて分析を行っている。これら先学の研究の二・三を簡単に触れ、筆者の分類との対比を行なうことにする。

麻生氏は九州の細石核を半円錐形→円錐形→半舟底状→舟底状という形態の変化でとらえ時間的な推移と結びつけて考えているようであり、具体的な遺跡の例として、福井岩陰第Ⅳ層→宇久島→野岳→唐津周辺→佐世保周辺を挙げている。九州における細石核の全体的な把握をいち早く行った事は評価されるべきであるが、あまりにも技術及び形態の進化論的發展を重視した点に問題が残さ

れているようである。福井Ⅳ層の半円錐形石核に続くものとして宇久島遺跡の資料を取扱っており、この理由として形態的に円錐形に近似し、技術的に打面調整の加工が認められることを挙げている。しかし宇久島遺跡出土の細石核は麻生氏のいう半舟底状が主体を占めているのでタイプサイトとしては当をえていないのである。次の円錐形は野岳遺跡が該当するものとしているが、野岳出土の細石核を円錐形で代表させるには疑問があり、この点については鈴木忠司氏の指摘の通りである。野岳の編年的位置づけについても再考の必要があると考えるがこれについては後で触れたい。麻生氏の細石核の見解で特に注意したいのは舟底状細石核における「西海技法」の提唱である。すなわち円礫を輪切り状に打ち割って円盤上の石核をつくり出し、次に斜め方向からの剝離で石核の打面を形成し、一端に打面調整を施し細石刃剝離を行うとするものである。福井Ⅱ・Ⅲ層や佐世保・唐津周辺出土の細石核に、細石核の打面形成以前の両面加工や片面加工の一部と考えられるような側面調整が確かに認められるのである。しかしながら礫を三分割して円盤状の両面ないし片面加工の母型を作らなくても、細石核の側面に打面形成以前の剝離面すなわち打面形成あるいは調整によってカットされる側面の剝離面を観察できるのである。細石核の分類で概に述べたA-I型、A-II型の製作手法において、細石核の側面に打面形成以前の調整のためのあるいは母型を得るための剝離面が認められるのである。そこで西海技法の実体は細石核の打面形成以前に側面の調整加工の一部が施こされているという点に見い出せるものとする。この点を西海技法と呼称するのであればそれなりの意義もあろう。もっともこれに「〇〇技法」という名を附すにはある種の抵抗を感じるのであるが、とにかく麻生氏が提唱する全工程をふまえての西海技法なるものの存在には肯首しがたい。その理由の一部については上に述べた通りであるが、以下のことをさらにつけ加えておきたい。「西海技法」と言われる一連の工程の考えるには量産を必要とする細石刃製作の技法としてあまりにも手がこみ入り過ぎ、複雑すぎるきらいが感じられるのである。仮に両面ないし片面加工の円盤状の母型を素材に用いるならば当然西海技法を有する遺跡において円盤状の母型、あるいは円盤状の母型に打面形成が行なわれ細石刃剝離作業の一段階前の資料が検出されてよいはずである。西海技法が認められる代表的な遺跡として麻生氏が指摘している福井洞穴のⅡ・Ⅲ層においておびただしい数の細石刃・細石核が出土しているようであるが、ここにおいても両面(片面)加工の母型や細石刃剝離の前段階の細石核の出土を聞いていないのである。このような事実を考慮すると「西海技法」なるものの存在が極めて否定的とならざるを得ないのである。「〇〇技法」なる言葉なり、その存在を提唱するにあたってはその技法をつちかった諸要素まで考察する事は別にしても少くとも製作過程の各段階だけでもっと明確な資料でもって示めされるべきであろう。

芹沢・鎌木の両氏は「長崎県福井洞穴」の中で福井洞穴出土の細石核を①型から④型までに分類を行い、層位的な事実と関連をもたせた見解を示めている。筆者が分類の基礎とした打面形成と側面調整の前後関係についての分析はなされていないが、その他の観察からおおよその対比は可能と考えられる。すなわち舟底形で剝片を素材にした①型はA-I型に、同じく舟底形で楔状の厚い碎片を用いた②型はA-II型にそれぞれ符合する。半円錐形をした④型はB-II型と共通するのである。問題になるのは③型で、説明されている文章によるとB-III型ともA-II型とも推察され、図示

された細石核模式図の③型ではA—I型の可能性も窺がえるのであるが明確に判断できない。

福井洞穴出土の細石核については林氏による非常に広い視野から論じたスケールの大きな研究があるので、その中の細石核の分類を一緒に検討することにしたい。

林氏は福井洞穴出土の典型的な舟底形細石核の母型は木葉形ないし三角形の尖頭器（面・片面加工）を考え、麻生氏の西海技法を条件つきで認めI型として分類している。さらにI型について母型は木葉形、三角形の尖頭器を想定し、加撃面は側面調整が完了してのちに形成され背面をもたないとして説明している。それでいてI型の亜型としているI b型では「ある程度調整をくわえられた原石核(?)から剝離された剝片が母型となる」との見解を示している。西海技法（林氏は福井技法と呼んでいる）についてはすでに述べたようにその存在には極めて否定的であるので、福井Ⅱ・Ⅲ層の細石核についても同様の立場をとりたい。Ⅱ・Ⅲ層出土の細石核の母型は細石核の打面形成に先立ってある程度側面調整が施こされた剝片ないし、楔形の核を考えるのである。筆者の分類に従えば林氏のI型は素材に剝片を用いるのでA—I型に相当することになる。

次にI型とⅢ型の分類の基準については、加撃面形成と側面調整の前後関係、背面の有無に立脚しながらⅢ型は「背面をもつ例は加撃面の形成は側面調整に先立っておこなわれる場合もある」と説明している。この説明ではⅢ型は背面をもつものもたないものがあり、さらに加撃面形成と側面調整の前後関係が一定していないことになる。これでは氏の二つの基準が基準でなくなり、分類がぼやけてしまっている。このⅢ型はさらにⅢ a・Ⅲ bとに細分しているがⅢ型自体が明確にされていないので細分の意図を把握しかねる。それでⅢ型については筆者の分類基準の基礎としている細石核の打面形成が素材に加えられた初めの剝離によってなされるか、あるいは側面調整の一部が素材の礫へ最初に施こされるか、これは言葉をかえれば打面形成と側面の大まかな調整剝離の先後関係ということになるが、それからするとA型とB型の両方に分類されることになる。これに母型の素材を加えるとA—I・Ⅱ型、B—Ⅲ型に対比されよう。林氏の細石核の分類は先に触れた芹沢・鎌木両氏の分類と基本的に軌を一にするものと思われる。それで、福井洞穴出土のⅢ型（③型）細石核は筆者の分類によるとA—I型、A—Ⅱ型、それにB—Ⅲ型の三つが含まれていると考えられるが、Ⅱ・Ⅲ層出土の図示された資料からA—I型・Ⅱ型を現段階での一応の結論としておきたい。打面形成と側面調整の前後関係が石核工作の手順を端的に示すものとしながらも具体的な分析に欠けているのは惜まれる。氏の再考を仰ぎたい。

もう一方の荒割りの礫を素材にした石核はⅣ型（Bグループ）とⅡ型、Ⅱ'型（Aグループ）とに分けている。

Ⅳ型は講ゆる半円錐形細石核と呼称されているものでその特徴は筆者のB—Ⅱ型と全く共通して問題はないと考える。ただこのⅣ型は福井Ⅳ層に限って出土していると述べているが、第1次調査報告書のⅣ層出土の図示された中に模式図のⅣ型のような典型的なものが見い出せないのである。その反面、素材が厚味のある剝片と考えられるものが認められるので、Ⅳ層出土のⅣ型細石核には荒割り礫を素材にしたB—Ⅱ型と剝片を素材に選択したB—Ⅲ型の両者が含まれているとみなすことができる。

Ⅱ型については荒割りの礫を素材にしていることを強調しているが、加撃面形成と側面調整の先後関係については全く注意されていないので筆者の分類に該当させることができないのである。第1次の調査報告書の実測図及び細石刃核模式図による限りでは、簡単な側面調整が加撃面形成に先立って行なわれていると考えられるのでA型に対比できよう。素材について林氏は荒割りの礫だけを用いているとしているが、Ⅱ'型のように背面がなく背縁を形成するものは荒割りの礫とするよりもむしろ剥片の可能性が強いものと考え筆者のA—I型に対比し、Ⅱ型をA—Ⅱ型のカテゴリーに含めたい。

最後に小林氏の論文を取り上げるわけだが、この小林氏の見解については概に林氏による論評があり、また、鈴木氏は具体的なかなり詳細にわたる意見が提出されているので多く触れることを避けたい。

小林氏は日本の細石刃インダストリーを「システムA・B」によって分類し理解しようとするものであるが必ずしもその目的をはたしたとは言い難いようである。西日本一帯の細石器文化を福井洞穴Ⅱ層出土の細石核をのぞいた他は全てシステムBで包括できるとの考え方にはその手順があまりにも無視された安直な論旨と言わざるを得ない。福井洞穴出土の細石核におけるⅡ層のシステムAⅢとⅢ・Ⅳ・Ⅶ層のシステムBの見解についても説明不足の感はまぬがれず、鈴木忠司・戸沢充則氏らの指適する通りである。筆者の分類ではⅦ層はB—I型・B—Ⅱ型、Ⅳ層はB—Ⅱ型・B—Ⅲ型、Ⅲ層はA—I型・A—Ⅱ型・B—Ⅲ型で、Ⅱ層はA—I型・A—Ⅱ型となり、Ⅱ層とⅢ層の細石核は基本的に共通するもので特に革命的な事件を抽出する変化は認められないのである。それから西海技法の存在を前提としたⅡ層のシステムAⅢの考え方にも納得できない。一方、素材に加えられる第一撃が打面の作出を意図し、その後石核の整形が行なわれるというシステムBの細石核製作過程の着眼は評価されよう。またこれまであまり注意されていない福井洞穴Ⅶ層出土の石核を取上げていることも注目に与いすると考える。ただその石核を小石核として理解し、その石核から到底剥離されたと考え難い大きさの小石刃を一緒に図示していることは理解に苦しむ。筆者は福井Ⅶ層出土の石核を細石核と考え、報告書で知る限りではB—I型とB—Ⅱ型の両者が存在すると理解している。これまでのⅦ層出土の石核に対する「小石核」としての理解の仕方は多分に意識的な資料操作の結果による事が多かったと思われる。すなわち、Ⅳ層出土の細石核は半円錐形で細石核の最も古い段階との考え方に、さらにⅤ・Ⅶ層という間層をはさんでその下のⅦ層出土なので細石核とすべきでないとの理解が前面に押し出された為であろう。またⅦ層出土の石刃が不揃いでⅡ～Ⅳ層の細石刃と比較して大形の縦長剥片なので区別するということから来ているようであるが、細石核と小石刃を結びつけて考えることに最初から無理があうように思える。福井洞穴の報告書の中で「Ⅶ層から出土する石核と刃器……、細石器文化の一部と考えてよいようで……」とのべているが、これまでの細石核の分類からは多々にして度外視されて来ているのである。小刃器についての問題は残るようであるが、石核は細石核として九州の細石器文化のカテゴリーで把握したいと考える。

以上、九州における細石器文化の研究の一部のうち、主として福井洞穴出土の細石核を中心に取扱い、分類の対比を行った。次に細石核の分類を基礎にして、九州における細石器文化の時期の区

分についての一つの仮説を提出することにする。

#### 4

九州の細石器文化の編年については、何人かの先学によって試みられている。

麻生氏の見解については概に触れたように細石核の変遷より4段階に分け福井IV層・宇久出土の半円錐形細石核が遡源的な技術・形態を有するとし、最後の舟底状細石核に土器が出現するとの見解を提出している。この両者の中間に野岳の円錐形石核、唐津周辺の半舟底状石核を設定している。

鎌木・間壁忠彦の両氏は「九州地方の先土器時代」の項で、ナイフ形石器文化、台形石器文化に後続するものとして細石器文化を考え、三期に区分している。すなわち福井第2・3層(直谷上層)石器文化―福井第IV層(直谷中層)石器文化―福井第7層(直谷下層)石器文化をを設定し、編年表では土器を伴う最後の第2・3層石器文化を福井第2層石器文化と第3層石器文化とに分離して考えている。

林氏は九州の細石刃技術の伝統を二段階に区分して考えている。第1期(前半)はIV型石核を有する福井IV層を典型的な例とし、続く第II期(後半)は福井技法と第I・II型石核複合の出現において把握している。第I期と第II期の技術的伝統の関係については氏の見解は出されていない。空間的な広がりや西北九州と南九州の対比を試み、I型石核の有無の違いを強調している。すなわち南九州では爪形文土器を伴う第II期の様相をもちながら細石核の技術は第I期がそのまま継承しているとの考えである。

以上挙げた三つの編年(時間的経過)についてはそれぞれ傾聴すべき点があると考えられると同時にいろんな問題が残されているように思える。個々についての問題は他の要素も加えて別の機会に論じることにしてここでは全体的な流れの把握にとどめたい。

最後に細石核製作過程の分類を基礎にした筆者の編年を試みることにする。九州の細石器文化を細石核の分類より4期に分けて考察するものである。(表1)

#### 第I期

野岳遺跡で代表されるB―II型を主体とするものと、船野上層出土の細石核を典型的なタイプとするB―I型及びB―II型が共に認められるものを第I期と考える。福井洞穴VII層もB―I・II型が見られるのでこの時期に相当するものと思える。一つのタイプがほぼ単独に出土する遺跡と二つのタイプの複合の形で把握される遺跡とが存在するのである。この二様のあり方のいずれが細石核のより初期の様相なのかについては今のところ明確な意見を打ち合わせていない。要するに第I期はB―I型細石核とB―II型細石核で特徴づけられる時期を考える。

#### 第II期

第I期において認められたB―II型と新たにB―III型が登上する時期を第II期とするものである。B―III型については細石核の分類で詳しく触れたように、形態的にも技術的にもB―I・II型やA―I・II型のそれぞれに類似点が見られるのであった。それでいて特に第III・IV期に普遍的なA―I・II型により強い関連が想定され、一応の予察としてA型の遡源的なものとしての見解をと

りたいのである。B-II型・B-III型が共存する遺跡は現在のところ極めて少ないようであるが、福井IV層、上場III層をこの第II期と考える。

### 第III期

従来舟底状、あるいは半舟底状と呼称されている細石核が出土する時期で、A-I型及びA-II型と分類される細石核がこの第III期において始めて出現するのである。第III期ではA-I・II型と共に第II期で見られたB-III型が共存するのである。一方B-II型も同じ遺跡において認められるようである。結局第III期はA-I・II型にそれ以前のタイプであるB-II・III型が伴い、4者の複合の時期と推察されるのである。原遺跡を始めとする唐津周辺の遺跡、堂崎、城ヶ岳、野黒坂の各遺跡が列挙でき、この時期の遺跡が最も多く知られているようである。ここでB-II型の共存については問題が残るものと思われる。というのはB-II型は形態的にも技術的にもA-I・II型とかなりの隔たりが考えられるので、その複合に一抹の疑問をさしはさむのである。将来A-I・II型とB-II型の共存している遺跡のあり方についての検討が必要と思われるので一つの問題点として提起しておきたい。

### 第IV期

細石核の最も新しい時期に位置づけられるグループでA-I型とA-II型が見られ、それ以前のタイプは認められず、反対に土器を伴うという革命的な出来ごとが認められるこの時期を第IV期と考える。この時期の遺跡としては福井洞穴第II・III層、上場II層、泉福寺洞穴などを挙げることができる。

以上細石核の分類を基礎に第I～IV期の変遷を一応の仮説として提起したわけであるが、これに他の要素として福井洞穴の層序及び、休場遺跡、福井洞穴のC14による年代、それに細石核共伴遺物の土器の有無を考慮に入れて今一度述べてまとめたい。

B-I型とB-II型を基本とする第I期はC14の年代測定の結果及びB-II型と休場・矢出川遺石出土の細石核の技術的・形態的類似から関連性が窺え、九州の細石核の内で最も先行するものとの見解が導びき出されよう。一方、A-I・II型を主体に土器を伴う第IV期が最も新しい時期として設定されることもまず問題はないであろう。そこで問題となるのは、両者の中間に位置づけられる第II期及び第III期である。結論から述べるとB-I・II型とA-I・II型の関連はB-III型を仲介にして一つの系統的な把握が可能であると考え。第I期と第IV期との間をII・III期と区分して考察したのは、九州の細石核の変遷の上でB-III型の登上、さらにA-I・II型の出現をそれなりに重要視せんがためである。B-II型とA-III型複合の第II期についてはその例が少ないが、類例の増加を待つて見討を加える必要がある。第III期の問題点については先に述べた通りであり、A-I・II型及びB-III型・B-II型?の複合が考えられる。しかしその主体はあくまでA-I・II型の存在で把握すべきと思われ、第IV期とは土器の有無を考慮することによって一応の区別ができるものとしておきたい。

細石器文化の編年試論として第I～IV期の設定を試みたわけであるが「編年」を論じるには、細石核の分類以外に細石核を出土している遺跡の様相や共伴遺物さらに日本全体における位置づけな

どあらゆる角度からの検討・考察の上に行なわれるべきと考えるので、ここではそれに到達するためのワンステップとして見ていただきたい。

第 I 期	B-Ⅱ型 B-Ⅰ・Ⅱ型	野岳 船野上層、福井Ⅶ層	休場 14,300±700 B.P 福井Ⅶ層 13,600±600 B.P
第 II 期	B-Ⅱ・Ⅲ型	福井Ⅳ層 上場Ⅲ層	
第 III 期	A-Ⅰ・Ⅱ型、B-Ⅲ型、 B-Ⅱ型(?)	原、野黒坂 堂崎、城ヶ岳	
第 IV 期	A-Ⅰ・Ⅱ型	福井Ⅱ・Ⅲ層 上場Ⅱ層、泉福寺	福井Ⅲ層 12,700±500 B.P Ⅱ層 12,400±350 B.P

表 1 細石核の変遷

#### 註

- (1) 福岡県文化課が九州新幹線装車場建設予定に伴う緊急発掘調査として1972年実施した遺跡であり、弥生時代前期の条構の底より現在まで20点余りの謂ゆる舟底形細石核が検出されており、それに伴うと考えられる爪形土器と一緒に発見されている。包含層の存在については不明であるが、細石核は福井Ⅱ層のそれに極めて類似している。
- (2) 福岡県筑紫野市大字針摺に所在し、1972年に別府大学考古学研究室にて発掘調査を実施。細石核・細石刃にナイフ形石器、台形石器が共伴している。福岡県教育委員会「峠山遺跡」福岡文化財調査報告第51集 1973
- (3) 宮崎県宮崎郡佐土原町に所在し、1969年より72年にかけて三次にわたる発掘調査を別府大学考古学研究室にて実施し、現在報告書作成中である。地点及び包含層の状況より大きく上層、下層とに分離でき、上層に細石刃・細石核と小形のナイフ形石器を主体とする文化層が考えられる。船野遺跡を紹介した文献として、賀川光夫「西日本における礫器の問題」(第四紀研究10巻4号1971)に所収されている。
- (4) 拙稿で用いる「母型」とは素材の礫に細石核製作のため打面あるいは側面形成を意図した打撃による剝離が施こされた段階のものに用いる。
- (5) 長崎県北松浦郡宇久町の城ヶ岳南麓に所在し、宇久町在住の瀬尾泰平氏によって50点余りの細石核が採集されており、他に小形の石刃石核・ナイフ形石器など貴重な資料が発見されている。筆者は実見する機会を与えられ、さらに資料の使用について快諾を得たものである。永年にわたり丹念な収集を行なった瀬尾氏に対して感謝の意を表わしたい。なほ瀬尾氏の細石核の一部は引用文献⑦において「宇久島遺跡」として図示され用いられている。

#### 引用文献

- ① 鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰第一次発掘調査の概報」考古学集刊3巻1号 1965
- ② 池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡」考古学集刊3巻4号 1967
- ③ 麻生優「泉福寺洞穴の第二次調査」考古学ジャーナル№61 1971
- ④ 杉原荘介・戸沢充則「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」考古学集刊4巻4号 1971

- ⑤ 福岡県教育委員会「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』所収 1970
- ⑥ (a) 和島誠一・麻生優「島原半島・百花台遺跡の調査」日本考古学協会38年度大会要旨 1963  
 (b) 鎌木義昌・間壁忠彦「九州地方の先土器時代、百花台遺跡」『日本の考古学Ⅰ』所収 1965
- ⑦ 麻生優「細石器文化」『日本の考古学Ⅰ』所収 1965
- ⑧ 小林達雄「日本列島に於ける細石刃インダストリー」物質文化16 1970
- ⑨ 林謙作「福井洞穴における細石刃技術とその東北アジア・北アメリカにおける位置づけ」上・下 考古学研究16—4、17—2 1970
- ⑩ ⑨に同じ
- ⑪ ⑧に同じ
- ⑫ 間壁葎子「香川県坂出市櫃石島採集の石器」倉敷考古館研究集報第4号 1968
- ⑬ ⑥(b)、⑦に同じ
- ⑭ 長崎県教育委員会「堂崎遺跡調査報告書」長崎県文化財調査報告第10集 1971
- ⑮ (a)④に同じ  
 (b)富樹憲治・戸沢充則「唐津周辺の細石器Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」考古学手帖14.16.18 19 62・1963
- ⑯ 下川達弥「佐世保市の先史文化概観」考古学ジャーナルN°44 1970
- ⑰ ⑦と同じ
- ⑱ 鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』所収 1967
- ⑲ ⑨に同じ
- ⑳ ⑧に同じ
- ㉑ ④に同じ
- ㉒ 鈴木忠司「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」古代文化23—8 1971
- ㉓ 杉原荘介・小野真一「静岡県休場遺跡における細石器文化」考古学集刊3—2 1965